

有明海水産資源回復技術確立事業*

アゲマキ増養殖技術開発試験（アゲマキ移植による養殖技術開発）

土井大生・重久剛佑・大渡功晟

当センターでは、有明海の重要な水産資源の一つであるアゲマキの資源回復を目的として、1996年度から母貝集団の創出に向け、種苗生産及び放流技術の開発に取り組み、殻長8mmサイズの稚貝を200万個規模で生産することで、母貝集団を創出するための放流技術の開発に成功した¹⁻⁶⁾。また、生産技術の進展に伴い、殻長2mmの稚貝でも数百万個の単位で一定程度母貝集団を創出することが可能となった。

かつて、有明海佐賀県海域で行われていたアゲマキの地撒き養殖は、春先に沿岸域で殻長2~3cm程度の稚貝を採取し、密度調整や養殖場の耕耘等を行い移植していた。この従来から行われていた養殖スケジュールを活用し、人工種苗の移植による養殖が可能か検討したので、その結果を報告する。

方法

2023年10月~2024年1月にかけて鹿島市浜地先の地盤高4.0mの干潟に殻長2mmサイズで放流した。その後、5月までに平均殻長20mmまで成長したアゲマキ稚貝を、2024年4月30日に取上げ、地盤高4mと2mへ密度をそれぞれ300個/m²と600個/m²に調整し、移植した。今年度の、移植養殖試験は、オレンジカゴ（アロン化成野菜収穫カゴ：写真1）に收容し、上部にはネトロン製の蓋を被せて強固な食害対策を施した。

調査は、移植後1~3か月に1回の頻度で行った。生残状況については、オレンジカゴからアゲマキを全て取り出して計数及び殻長の測定を行い、その後計数結果から生残率を算出した。

結果

移植後9月の生残率は、地盤高4mで75.0%、地盤高2mで60.9%であり、9月までは地盤高4mの生残率が高かった。しかし、11月調査時には、生残率が地盤高4mで39.0%、地盤高2mで42.9%まで低下した（図1）。

殻長については、11月調査時点で、地盤高4mでは平均殻長55.0mm、地盤高2mでは平均殻長57.2mmまで成長した。

両区ともにこれまでに斃死が多かった9月までに生残

率が6割以上生残し、平均殻長も50mm以上であった。しかしながら10~11月までに両区ともに生残率が50%以下まで低下した。

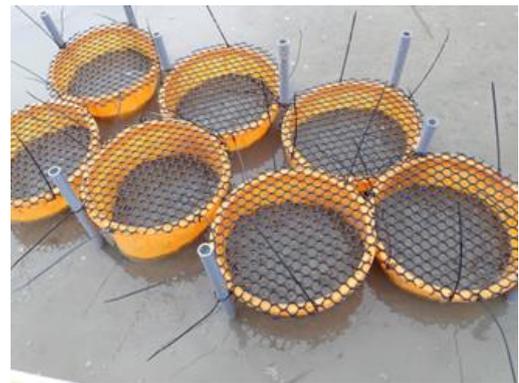


写真1 養殖試験の様子

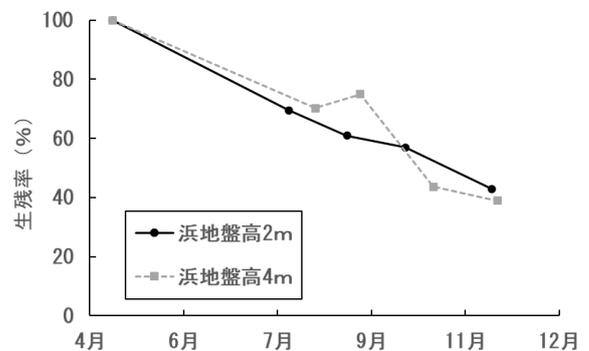


図1 移植後の養殖区画の生残率の推移

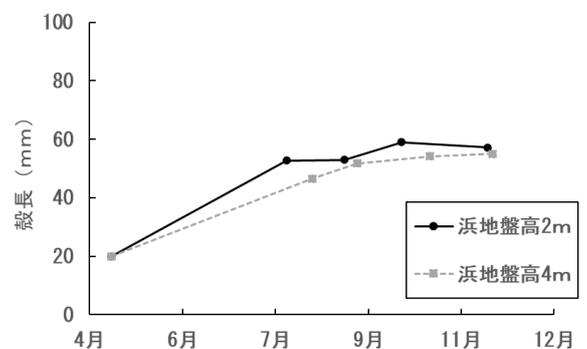


図2 移植後の養殖区画の殻長の推移

文 献

- 1) 大隈 斉・江口泰造・山口忠則・川原逸朗・伊藤史郎 (2003)
: 有明海におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟, 佐有水振セ研報. (18), 21-24.
- 2) 津城啓子・大隈 斉・藤崎 博・有吉敏和 (2009) : 有明海
におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟-II, 佐有水振セ
研報. (24), 1-4.
- 3) 津城啓子・佃 政則・大隈 斉・古賀秀昭 (2013) : アゲマ
キ放流稚貝の生残・成長と底質 (物理環境) との関係, 佐
有水振セ研報. (26), 93-100.
- 4) 佃 政則・神崎博幸・福元 亨・梅田智樹・荒巻 裕・伊
藤史郎 (2017) : 被覆網による放流後のアゲマキ稚貝の散
逸対策, 佐有水振セ研報. (28) . 43-45
- 5) 佃 政則・野間昌平・神崎博幸・福元 亨・野田進治・梅
田智樹 (2019) : 被覆網を用いたアゲマキ放流条件の再検
討, 佐有水振セ研報. (29) . 5-9
- 6) 野間昌平・大庭元気・重久剛佑・野田進治・佃 政則 (2021)
: 被覆網を用いたアゲマキ放流手法の高度化, 佐有水振セ
研報. (30), 26-30.